

通 教 月 報

診 療 情 報 管 理 研 究

平成23年11月号

編 集

発 行 人 武田 隆久

〒102-8414 東京都千代田区一番町13-3

社団法人 日本病院会 通信教育課

TEL 03-5215-6647 (受講生専用)

FAX 03-5215-6648 (受講生専用)

URL <http://www.jha-e.com/>

受付時間 9:00~17:00

(ただし、土・日・祝祭日、年末年始は除く)

発 行 日 毎月1日

定 価 1部 150円 1カ年1,600円(送料共)

郵便振替 00190-5-396045

名 義 社団法人 日本病院会 通信教育部

## 半世紀も前のこと

吉田 啓治

医療法人財団厚生会 老人保健施設ルネサンス麻布 施設長  
東京会場 基礎課程(臨床医学各論Ⅶ) 講師

1960年代初め、羽田空港からはじめての海外旅行に飛び立った。アメリカ中部の州立大学医学部付属病院に留学のためだった。飛行機が高度を下げ始めると下は一面の銀世界、空港に降り立つと零下十数度(華氏表示のためピントこなかったが、確か0°Fとあった)。

まず、ボスに挨拶のため大学病院の玄関に入ると、二重構造になっておりホールに一步はいると快適な室温で驚いた。日本を出るときの病院廊下の寒かったことを思い出し、その差に何故か戦時中、終戦直後頃のことを思い浮かんだ。

教授室の並んだ管理棟の廊下はフカフカの絨毯が敷きつめられており、広い一室に秘書がいて、その奥がボスの教授室であった。これまで何度かの文通はあったが、初対面ということもあり緊張の余り会話が成立せず、困ったボスに英会話を3ヶ月位練習するようにと命ぜられた。

秘書に連れられて病院を案内され、何人かのスタッフを紹介されたが、彼女や職員達とはそこそこ会話ができていたと思う。しかし、当時の日本の大学病院設備とアメリカのそれと比較して、その差の大きさに感心するとともによくこんな国と戦争をしたものだと考えさせられた。

病院生活が始まり驚くことが多々あったがその2、3を思い出すままに述べてみたい。

その1. 外来玄関わきに広大な明るい部屋があり多くの職員が忙しそうに働いている。時間外、休日も人員は少ないが常に働いている。聞くとチャート室(カルテ室)という。外来診療分は当然その日のうちに整理されるが、入院カルテについて聞くと、退院後(大体、午前中に退院)その日の午後4時まで担当医はすべての記載を済ましてカルテ管理室に送る。そこで管理士が直ちにチェックして不備があれば午後6時まで担当医に返ってくる。その後は可及的速やかに整備してカルテ室に返納する。それでも不備があったらと聞くと、主任教授に連絡が行って許可を得て再度整備しなければならないということであった。

その2. 手術が終ると術後の手洗をしながら、その前にあるマイクに口頭で手術所見、手技を喋ると、秘書室(複数の秘書が居る)に通じ、タイプされ、担当医が自室に戻るとすでに机の上にタイプされた手術表が置かれていて、それをチェックしカルテに綴じて終了する。

医療統計の充実と迅速さに感心した記憶がよみがえる。

本邦でもその域に近づきつつあると考えられる今日此の頃である。